がんばろう
南三陸町
復興第８５号

南三陸マイタウン月刊情報

発行所
千葉総合印刷株式会社
本吉郡南三陸町志津川字沼田 150-84
TEL(46) 3069　FAX(46)3068
企画・編集
志津川広報センター

上山八幡宮で　たがい市

９月 14・15 日上山八幡宮で「秋季例祭」が開催された。14 日の宵宮祭は 17 時 30 分からで、神事・巫女舞・夜神楽が奉納された。本殿への階段にはロウソクの列がつくられ、氏子や参拝の子どもを連れた家族や、地区の住民が足を運んでいた。待ちきれない人たちが神楽の舞台前に、出店で買ったものを持ち込み、始まるのを楽しみに座って待っている姿があった。

たがい市に来場された皆さんをコーラスの方々が合唱で楽しませてくれ、上山の八幡様の 18 時 30 分「奉納　夜神楽」の前に、出店で食べ物を買い、用意されたテーブルで音楽を聞きながら楽しんでいた。

２０１９八幡さまで「たがい市」

主催はＮＰＯ法人ウィメンズアイで、宮城県の助成金を受け運営している。今回開催は９月 14 日（土）の 16 時から 19 時半まで、志津川上山八幡神社駐車場を会場に行われた。

団体はおそう菜や手作り雑貨、園芸品、パンなどを売る、小さい商いをしている人たちが、皆さんの地域へ出張互市（たがいいち）として、地域のイベントや集まりに出店を行なう。今回は上山の八幡さまの祭りと同時開催となった。

焼き鳥なっちゃん、クレープ大沼農園さん、トン汁・カレーはウィメンズアイ＋ひころマルシェさん、他にも寄せ植え、縁日屋台など、お楽しみ満載の屋台が並んだ。

何も無くなった志津川地区の市街地に地域住民の集える場所として、今後も活動を期待したい。夜の町の神社に、賑わいと灯りが八幡様の境内に広がっていた。

15 日の日曜日には「神輿渡御」と「稚児行列」があり、さんさん商店街の中を 25 名の来年小学校入学の子供たちが、行列を作って参加していた。

入谷八幡神社の秋季例大祭

入谷中の町地区の稲穂の中を進む

９月 15 日の秋晴れの中を、華車を先頭に奉納八幡神社ののぼりに神輿が続き、入谷打囃子の舞手と地域住民の長い列が入谷地区を練り歩いた。

御祭が開催される前から、持ち回りの地区が準備を進めていた。今年は「水口」地区がその役割を担った。

南三陸ラーニングセンターＨＰより

平成 11 年宮城県無形文化財指定
入谷打囃子

■入谷の秋祭り

美しい田んぼの景色に囲まれた南三陸町入谷地区。毎年９月半ばに 250 年の歴史を持つと云われる秋祭りが行なわれます。祇園囃子の流れをくむと伝えられる優雅なお囃子と勇壮な獅子舞。色鮮やかな衣装を身につけた子どもたちと獅子が入谷地区の黄金色に染められた景色の中をゆっくり、ゆっくり練り歩くのです。

入谷打囃子は、芸人と呼ばれる獅子舞、獅子あやし、笛、小太鼓、大太鼓のほか、先陣旗や神威を示す花飾りを持つ人たちで構成されています。

一行は入谷八幡神社へと向かい、到着すると五穀豊穣と家内安全を願い、獅子舞を奉納します。その後、神輿を先頭にお旅所とよばれる「一本松」を目指して黄金色の田んぼの中を練り歩きます。そして一本松に到着すると、そこでも入谷打囃子が奉納されます。

■入谷打囃子の歴史

入谷八幡神社の例祭で行なわれる神輿渡御と打囃子による祭り行事で、打囃子は明和元年（1764 年）が初奉納と云われています。

■紡がれる伝統

地元の入谷小学校では、伝統芸能の継承として打囃子保存会の指導で、笛や太鼓の練習をし、伝統芸能の継承に努めています。平成 11 年には宮城県の無形民俗文化財に指定されました。

子どもも大人も毎晩集まってお囃子の練習に励む姿、秋風を背景に流れる笛や太鼓の調べ、黄金色の田んぼと花飾りの鮮やかなコントラスト。村人によって毎年繰り返され、大切に受け継がれてきたもの。数百年前もきっと、同じ光景がみられたのでしょう。

神輿のお休み場としての「一本松」に立ち寄り、打囃子を奉納する。

中の町にある「一本松」は、害虫によりこれまで手入れをしてきたが、倒木の危険を考慮し伐採され、今年に入り支援団体により「桜」が植樹され、新たな伝統の一歩を印した。

ツールド・東北２０１９

大漁旗でライダーを応援

９月の 14・15 日の連休の前半、東北地区の被災地応援のツールド・東北の７回目が開催された。好天にも恵まれ、ライダーは三陸沿岸の 45 号線を滑走していた。

石巻市の専修大学から気仙沼市内を走る「気仙沼コース」と「南三陸コース」など５コースに４千人が参加した。気仙沼の出発式には、100Ｋコースに 440 人がスタートラインに立った。

16 日には、仙台市で台湾の自転車メーカーの開催者 20 人が、秋保地区を走行した。仙台市の郡市長も、宮城の観光地を巡る「サイクルツーリズム」で汗を流した。

マナーを守り安全走行

南三陸町の志津川地区の商工団地交差点では、親子らしい２人が歩道で一生懸命に大漁旗を振る姿があり、ライダーは手を上げ応援に応えていた。志津川海岸インターのＴ字路の信号では車の交通量が多く、「お先にどうぞ！」と右左折の車両を優先させ、交通マナーの順守で「ツールド・東北 2019」を楽しんでいた。

復興期も残す所１年半となり、全国・世界から被災地支援の流れが続く事を願っている。

未来への教訓

復興！　大津波の記憶を風化させない

令和元年（2019年）
～ 地元報道より ～

５月の出来事

南三陸町

◆１日南三陸町役場に、新天皇陛下の即位へ祝意と上皇陛下の天皇退位に感謝を示す記帳所が設置された。午前９時の開始から次々と町民らが訪れた。

◆南三陸町神割崎キャンプ場で、潮騒まつりが３日から始まった。16 店が出店し、海産物のほか、海の幸を生かしたメニューを販売した。多くの人出で賑わった。

◆南三陸町の「ハマーレ歌津」で、２周年記念イベントが開かれた。ホタテ焼きの販売やワカメ汁の振る舞い、ステージイベントなどがあり、好天にも恵まれ商店街が盛り上がった。

◆県は志津川高校の第１体育館の建て替えを本年度から設計を行ない、2021 年秋の完成を目指すとした。完成から間もなく 49 年となる本体は壁面のひびなど老朽化がめだっている。

◆志津川湾さけます増殖協会による、今シーズンのサケの稚魚の放流が終了した。今シーズンは２月 12 日に始まり４月まで６回、八幡川と志津川湾の２ケ所で放流を行なった。放流数は 574 万２千匹と昨シーズンの約７割にとどまった。

◆北海道から神戸までを自転車で巡り、チャリティーライブをしながらゴールを目指す仙台出身のバンド「ザ・燃え上がるズ」のボーカル、タバティー・タバタさん（27）が南三陸さんさん商店街を訪れ、町民らを元気づけた。父が南三陸町出身ということで、祖父母や親戚らも駆け付けタバタさんの歌に聴き入った。

◆９日、伊里前小学校の３年生 32 人が伊里前川で伝統のシロウオ漁を学んだ。講師は祖父の代からシロウオ漁を続けている渡邉千之さん(70)。伊里前小学校では歌津の自然に触れる学習の一環で、３年生がシロウオ漁を学んでいる。

◆志津川高校自然科学部の生徒が八幡川で行った生物調査の結果を冊子にまとめ、4500 部を作成した。掲載した冊子には絶滅危惧種も含まれ、種類が特定された 41 種を掲載した。冊子は町内の小中学校に配ったほか、町生涯学習センターにも置いている。

◆南三陸町内の学校用地に最後まで残っていた仮設住宅の、志津川小、中学校の団地が３月末までに撤去され、ようやく震災前の状態に戻った。

◆11 日小中学生が体験を通して、町の自然や歴史を学ぶ「南三陸少年少女自然調査隊」が発足した。小４から中１までの 13 人が参加。活動は月１回のペースで行なわれ、干潟の生物調査や他地域の子供たちとの交流など活動で発見した町の魅力を発信していく。

◆12 日南三陸町入谷地区で、伐採された「御休場の一本松」に代わる新たなシンボルとしてサクラの木が植えられた。一本松の推定樹齢は約 180 年とみられるが、病気のため根元から伐採された。代わりに一本松があった脇にソメイヨシノ２本が植えられた。

◆南三陸町の防潮堤整備の全体進捗率は、３月末で約２割の 17．8％にとどまっている。復興期間終了まで２年を切った。最後の工事発注が３月に完了したばかりの港もあり、ようやくこれから工事が本格化していく。

◆南三陸町の地域おこし協力隊員の活動報告会が、町役場第２庁舎で 13 日開かれた。報告会は取り組みを周知し今後の活動につなげるため行なわれ、町民や町職員らが報告を聞いた。

◆春の交通安全期間中の 14 日、志津川で「幼稚園児ほほえみ作戦」が行なわれた。子供たちがドライバーに笑顔で安全運転を呼び掛けた。あさひ幼稚園年中児、入谷ひがし幼児園年長、南三陸地区交通安全協会、安全運転管理者会などから 50 人が参加した。

（前ページよりの続き）

◆南三陸町歌津の平成の森球場の観客席に、楽天生命パーク宮城で使用された座席が、バックネット裏に千席取り付けられた。装いを一新した球場で町内外の観客を迎える。

◆東日本大震災の被災者むけの国定金利融資〔災害復興住宅融資〕の昨年度の利用状況をまとめた。南三陸町は今年３月末までに261件。

◆今月から南三陸町の名物「南三陸キラキラうに丼」の販売が始まった。キラキラ丼の中でも不動の人気を誇るウニバージョンには、県内外からのファンが訪れている。

◆『みちのくＧＯＬＤ(ゴールド）浪漫 ― 黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる―』に選ばれた。気仙沼市と南三陸町を含む２市３町が産金にまつわる文化財などを集めた「みちのくＧＯＬＤ浪漫」を申請したもの。みちのくにまたがる金産地の歴史を生かした、観光振興が期待されている。

◆チリ地震津波から59年となるのを前に、21日から生涯学習センターで当時の写真などを集めた資料展が始まった。早朝の津波におそわれた旧志津川町は、312戸が流出し、犠牲者41人、被害額が52億円にのぼる大惨事となった。

◆ＪＲ気仙沼線ＢＲＴの専用道の清水浜 ― 歌津間４．４キロが６月15日新たに供用を開始する。志津川中央団地付近 ― 清水浜間も運行を再開することで柳津 ― 気仙沼間が４分短縮する。

◆31日「三陸ひまわりの会」（及川博之会長）の、一斉種まきが行なわれる。東日本大震災の被災地にヒマワリの花を咲かせ、復興のシンボルにしようと「はるかのひまわり絆プロジェクト」運動を展開している。

◆東日本大震災で被災した南三陸町志津川の、志津川高校駐輪場下の水田で26日、「田んぼアート」の田植えが行なわれる。アートは稲が伸びる６月下旬ごろから浮かび上がり、秋の収穫祭まで楽しめるという。

◆台湾・台北市の柯文哲市長が、南三陸町の志津川病院などを26日訪問し、東日本大震災からの復興状況などを視察した。富山県で23～25日に開かれた「2019日台観光サミット」に合わせて来日したもので、台北政府の要望により南三陸町の視察が組まれた。

◆教育旅行で南三陸町に滞在している、台湾の嘉義県立竹崎高級中学で音楽を学ぶ高校１・２年生 50 人と教職員６人が志津川小学校を訪れた。伝統的な中国楽器を使った、演奏を披露した。両校の子供たちとダンスを踊るなどで楽しい交流となった。

◆南三陸町志津川地区に整備する、南三陸震災伝承館「仮称・南三陸３１１メモリアル交流館」の、住民との意見交換会が 24 日まで町内２会場で行なわれた。歌津会場は６人、志津川会場は 17 人の参加だった。検討委員会の意見も合せ、６月末までに基本計画をまとめ、年内にも基本設計に関する住民説明会を開く。開館は2021年４月を目指している。

◆南三陸町教育委員会が、県教委のみやぎ「行きたくなる学校づくり」推進事業の指定を受けた。志津川中学校区（４小中学校）をモデルに、期間は2020年までの２年間。

青空の下、跳んで走った志中生

令和元年度志津川中大運動会

８月31日はグランドコンディションの不良から、翌日９月１日（日）に順延となったが好天に恵まれ、「轟（とどろき)～ 響き渡れ志中の名～」と題された秋の恒例行事の大運動会。多くの家族が見守る中で志中生が堂々と行進し滑走し飛び跳ね、クラスごと赤青の対抗戦など生徒一人ひとりが自分の持てる力を発揮した。

入場行進ではクラス紹介があり、282 名の気合いの入った赤青の行進から始まった。

開会式では実行委員の小山君が「３年生を中心に練習に励んできました。赤青の二色対抗となり、仲間どうしの対決もあります。最高の運動会にしていきましょう。」と挨拶した。

三浦校長の挨拶では、「猛暑の夏となり練習もできないなかで、一致団結してこの日を迎えた。スローガンが、地域全体に「志中の名」が響き渡り、地域に勇気を与えます。」と述べた。安部ＰＴＡ会長の祝辞では、「精一杯持てる力を発揮してください。健闘を期待しています。」とエールを送った。

プログラムの１番目は、２年生オールメンバーリレーで４人の生徒が赤・青・青・赤と多くの声援の中、家族の目の前を風を切って走っていた。２番目は１年生色別対抗の「25 人 26 脚」で、「イチ・ニイ」と声を合せ１歩ずつ前へ進んでいた。つまずき、ひっかかり転ぶ姿に、会場からは笑いがもれていた。ゴールまで「あと少し」と、なかなか前に進まないチームに声援が飛んでいた。

３番目の長縄とびは１～３年のクラスごとの対戦で、進行の運営テントからは「３年間の友情を発揮して下さい。」「最後まで諦めないでより良い結果を出して下さい。」とアナウンスがされた。

何回跳んでも足にひっかかるチームが、最後まで挑戦し 20 回も続くと、会場からは拍手と声援が飛んだ。２回挑戦して多く飛んだ回数が成績となる。今年で最後の運動会となる３年生は、１組（赤）が50回、２組（青）が13回の結果となった。

一日晴天の中、志中の高台のグランドからは、生徒・家族の歓喜の声が志津川市街地に響きわたっていた。

志高文化祭は大盛況

アッセンブルに！

８月31日の志高生の文化祭恒例の「仮装行列」で始まり、多くの町民や生徒の家族が校舎前の企画テントに群がり、生徒たちが調理し販売までの計画を、仮装告知が功を奏し多くの来場者を迎えた。

「旭ヶ浦祭２０１９」は「～志高……アッセンブル！～」と題され、後藤実行委員長の挨拶には「アッセンブル」の意味として「集める、組み立てる」と紹介し、「志高の生徒だけでなく、先生方やお越しいただいた方々が集まり、この旭ヶ浦祭を盛り上げる。」そんな意味を込めたと語る。

屋外テントはクラスやＰＴＡ企画があり、２年２組では「力士たちの稽古部屋」と題し、大盛りのピラフと格安の餃子を販売し、２年３組の「ガン子ちゃんカレー屋さん」は学年担任がカレー好きなことから企画した。ＰＴＡは「かき氷屋」と、テントの前は来場者でいっぱいとなった。価格も250円前後で、２つ３つと買い求め、テント前では座りながら歓談の輪ができていた。

各教室でもクラス企画や音楽の発表など、工夫にとんだ志高生の活動が見られた。そんな中で自然科学部の「ゴカイと愉快な仲間たち」の研究の発表を、みなさんに部員が説明していた。子供たちには「海藻のしおり作り」を紹介した。また、生徒の活動の研究発表では生徒がまとめた表を丁寧に説明してくれた。ネイチャーセンター準備室の阿部拓三先生、福岡研究員の指導を受け、南三陸町の海中生物の実験や研究は楽しいと話してくれた。

被災地の高校生として、まだまだ不自由な環境の中で、生徒は各々が自分の取り組むスポーツ・勉学に精一杯活動していた。

南三陸町人口の推移

（令和元年８月末現在）

	南三陸町	志津川	戸倉	入谷	歌津
22年３月	17,815	8,294	2,433	1,907	5,181
30年８月	13,056	5,361	1,424	1,967	4,304
元年８月	12,740	5,175	1,395	1,941	4,229
30年8月からの増減数	－316	－186	－29	－26	－75
元年7月からの増減数	－25	－20	－6	－1	2
世帯数	4515	2035	475	653	1352

（2019年９月の新聞記事より）

・13カ月連続人口の減少
・８月の出生２人、死亡は13人

七人の侍 来町

志中剣道部に剣道指導

９月14日（土）午前10時から、志津川剣道協会の会長小山光夫七段教士と同じ七段取得の高段者が８名が、志津川中学校の剣道部員10名に剣道の指導をし、合わせて高段者同士の練習風景を見て、打ち込みや技、姿勢、気合いを学んだ。

小山会長

練習会を準備した小山先生は、「皆さんの姿を見て学んでください。」と話した。８人を代表して大場七段が参加された先生方を紹介し、「小山会長とは剣を極める剣友として 20 年の付き合いがある。」と、互いに切磋琢磨する剣道の友達であり、人生の友であると感じた。

小山会長は、剣友でもある「宮城県警七人の侍と剣の交流」を企画し、現在も指導している志津川中学校剣道部員も、「高段者からの剣道の指導を受ける」ということを目的にこの練習会を計画した。

「礼に始まり礼に終わる」との剣道の精神のもとで、始めは志中生との稽古をする。２分間の回り稽古では、打ち込み方、竹刀の剣先の位置など、稽古の中で一つひとつ丁寧に指導をした。その後は、先生方の練習風景を目を丸くして見入っていた。

道場からは、「ヤー」「メン」「ドー」と気勢の張った気合いが、生徒を剣道の魅力へと引き込んでいた。